

発掘調査の概要

藤原宮大極殿院の調査(飛鳥藤原第186次)

藤原宮の中心部の下層には幅6～9m、深さ2mほどの大規模な南北溝が貫流しています。この溝は、宮の造営に関わる資材を運搬するための運河であると考えられ、現在までに藤原宮北面中門から朝堂院までの南北570mで確認されています。大極殿や大極殿院南門は、運河を埋め立てた後に造営されたことがわかっています。

1977年の第20次調査では、この運河から天武天皇末年の木簡が出土し、藤原宮の造営がこの頃には本格化していたことがあきらかになりました。このように、運河は藤原宮造営過程を理解する上で重要な遺構です。今回は大極殿院内庭の中央部南側で、藤原宮期の遺構を保存しつつ、南北約6mの範囲で運河を調査しました。

検出した運河の規模は、幅約6.7m、深さ約1.8mでした。最下層には粗砂が堆積しており、この層は運河が機能していた時のものです。この粗砂層からは多量の土器、木製品、種子類が出土しました。また、獣骨が大量に出土していることも特筆すべき成果で、これまで確認しているものには、馬、牛、犬等があります。特に馬については、完形の頭蓋骨が3個体出土しており、その年齢、性別、出自、利用方法等の解明が期待されます。

昨年度と今年度の調査で、大極殿院内庭の南半部の様相があきらかになりました。古墳時代から平安時代まで様々な成果があがり、今後の調査研究のための重要な資料が得られました。

(都城発掘調査部 大澤 正吾)



運河完掘状況(南東から、右奥が大極殿)